

第31回

曲を作って楽譜を書いてみよう ～音楽の伝達手段を知る～

学習のねらい

音楽と親しむためには、演奏・鑑賞・創作という三つの柱がありますが、中でも創作（作曲）は音楽の根源とかかわる行為であるだけに、難しそうに敬遠される傾向にあります。しかし、「作りたい」と思えば、簡単にできることでもあります。曲を作るには具体的にどうすればよいか？ 作曲家は何を考えているのか？ 実際に楽譜を書くにはどうすればいいのか？ などを、具体的な例をとおして実践していただくためのヒントをお話します。



講師
青島 広志

楽譜の存在理由を考える

楽譜がなくても音楽を生み出すことができます。作った人が歌ったり、楽器で演奏したりすればよいからです。しかし現在、「作曲する」という行為の大半は楽譜を書くことによって行われています。

第1に、その場にはいない人にも作曲者の意思を伝達することができます。ちょうど手紙と同じような役割を果たします。

第2に、その曲を保存することができます。音楽はその場限りで消えてしまうので、録音などが不可能だった古い時代は、楽譜に残すことは特に不可欠でした。つまり文字と同じだと考えられます。

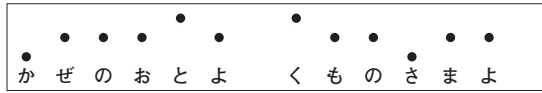
第3に、再現するために必要です。記憶だけでその曲を演奏することは、必ずしも正確というわけにはいかないでしょう。ただし、現在使われている記譜法では、音の高さ・長さは比較的正確に表せても速さ・強さ・雰囲気などは漠然としか表せません。それらは、演奏者に任せられているのです。

メロディーを中心に楽譜の書き方の基礎を知る

人類が最も古くから作り出してきた旋律の多くは言葉（詞）を持っています。詞には高低のイントネーション（抑揚）と長短によるリズムがあるので、朗読しただけで音楽作品になり得るのです。

曲にしようと思った詞を、何度も読む間に、だいたいの旋律線が決まります。

例として「海辺の歌」（林 古溪作詞・成田為三作曲）を次に記します。



これでメロディーの高低は決まりましたが、リズムについては拍子を考えなければなりません。波や風の揺れを表すにはうってつけの8分の6拍子が使われています。仮に楽譜が書けなくても、ほかの人に頼んだり、鍵盤を弾くとそれが楽譜に置き換えられる装置も発明されています。

作曲はどのようになされているのかを知り、興味を持つ

まず簡単な詞を作ってみましょう。

- ①「私はきょう、学校に行きます」……朗読すればメロディーの高低はわかりますが、勝手に音を並べただけでは意味を成しません。何の音から始まる、何調の音階を使えばよいか重要です。まず、書くのが易しいハ長調を選び、終わりをハ（ド）の音、始まりをド・ミ・ソのどれかからか選びます。拍子は作曲家が自分の代表作に使うことが多い4分の4拍子を使います。拍を打ちながら、ある程度の意思を持って唱えてみれば、リズムは決まります。（譜①）忘れてはならないのは山場^{やまば}で、音楽のような時間芸術では後のほうに設定します。

②次は、歌詞の一部を変えて「踊りに」にします。踊りの拍子は3拍子なので4分の3拍子、はつらつとしたト長調で作ってみましょう。(譜②)

③最後に「海に」に変えます。「浜辺の歌」にならって、8分の6拍子で、安全な海へ行くと考えて、優しい感じのヘ長調にします。(譜③)

譜①  (☆は山場)

わたしはきょう がっこうに いきます

譜②  ☆

わたしはきょう おどりに いきます

譜③  ☆

わたしはうみに いきます

* * *

歌の曲を作るには、声域について知らなければなりません。女声はソプラノ・アルト、男声はテノール・バスに分かれています。実際に歌いながら書いてみるのが大切です。

ワードファイル

記譜法 : 楽譜の書き方の原則のことで、現在主流となっているのは、五線上に音符を記す方法で、作曲者の意思をほぼ表すことが可能。

山場 : クライマックスとも言い、音楽・演劇・舞踊などで最も盛り上がる部分を指す。

声域 : 声の音域のことで、個人差がある。低音は舞台上では聴こえにくく、高音は言葉が伝わりにくい。